

日・タイ語の動詞慣用句の統語的階層関係
——「上位の階層」を中心に——

Syntactical Hierarchy of Verb Idioms in Japanese and Thai Language

--Focused on “Upper Ranking Level”--

カンタムパン・スタラー

Soontaree CUNTHRAMPUNT

慣用句の特徴として、統語的操作を受けにくいということが指摘されている。しかし、実際には、慣用句には、統語的な制約が比較的強いものから比較的弱いものまで様々なものがある。慣用句に加えられる様々な統語的な操作は、統語的制約度合いによって6つのレベルに分けられ、「階層関係」をなすことが示されている。この統語的操作を用いれば、多くの慣用句に関してある階層までの操作は受けられるが、それより上の階層の操作は受けられないことも明らかにすることができ、日本語の慣用句には統語的操作の階層関係が存在することが証明された。そこで、本稿では、同様の手続によって、タイ語に統語的操作の階層関係の上位階層も認められるかどうかを検証するにあたり、日本語の慣用句に見られる統語的階層関係を分析し、タイ語における統語的階層関係を上位階層に限定して対照分析した。その結果、タイ語に統語的階層関係の上位階層も存在することが明らかになった。

キーワード 動詞慣用句、統語的階層関係、上位の階層、統語的な操作、階層関係

It is widely held that one of distinctive characteristics of idioms is their tendency to be syntactic frozenness. However, in fact, it has also been pointed out that some idioms show resistance to most syntactic operations, while others are able to undergo a variety of such operations. It is proposed that the syntactic operations applicable to verb idioms can be classified into six types, and that these types constitute a “hierarchy”. It is clarified that a Japanese idiom can be analyzed as belonging to a certain level in the hierarchy if it is 1) able to undergo all of the operations included in the levels below it, and 2) unable to undergo the operations included in the levels above it. Therefore, based on the rule using as same procedure, the aim of this article is to investigate whether a Thai idiom limited to upper ranking level can be analyzed to the hierarchy following the rule, comparative to a Japanese idiom. The result revealed that a Thai idiom at upper ranking level also can be analyzed as belonging to a certain level in the hierarchy.

Key words Verb Idioms, Syntactical Hierarchy, Upper Ranking Level, Syntactic Operations, Hierarchy

1. 研究の背景と目的

タイにおける日本語教育では、日本語文法や教授法が多く研究されているが、日・タイ語の意味、特に慣用句に関する対照研究はほとんどされていない。慣用句の日・タイ語の対照研究を行うことで、日本語教育の現場の中で役に立てると考えられる。慣用句の意味を扱った研究には様々な観点があるが、本稿では慣用句の意味を具象性の観点からの考察を試みる。「具象性」とは、構成要素の文字通りの意味によって表される事柄である（伊藤 1999c）。例えば、「足を引っ張る」は「身体部位の自由な働きを封ずる」という具象性を表しており、この具象性から「物事の進行を妨げる」という慣用句としての意味が生じたと考える。

慣用句はその形式が固定しており、文レベルで様々な用法・統語上の制約を受けるとされている（宮地 1982b、村木 1985）。制約とは、例えば日本語の慣用句で言えば、名詞句に転換されたり受身表現になったり連用修飾語が挿入されたりすることがないということである（石田 2000：24）。例えば、次の慣用句は統語的に制約が強いものを示す。

- 1) 名詞句への転換 目を掛ける → *掛ける目 / *掛けた目 / *掛けている目⁽¹⁾
- 2) 意志表現化 目を剥く → *目を剥こうと思う

ところが、これらの例のように統語的制約が強いものもあれば、逆に統語的に制約が弱いものもある。つまり、様々な統語的な操作を許すものもある（森田 1985）。

- 3) 名詞句への転換 目を伏せる → 伏せた目
- 4) 意志表現化 目を向ける → 目を向けようとする

これらの慣用句のように、慣用句が文レベルで統語的な制約を受けるという特性を慣用句の「統語的固定性」と呼ぶ（石田 2000:24）。石田(2000)は慣用句の調査結果の分析を中心に、統語的操作間の階層関係を考察した。

タイ語では、慣用句は「文字通りの意味とはまた別の意味に慣用的に使用する表現をいう」とされている（富田 1990:1806）。その場合、日本語、タイ語など言語の違いによらず慣用句は形式固定性を持つという指摘がなされた（Sorsothikul 1981:1）。また、カンタムパン(2012a など)によってタイ語に変異形が存在するという指摘がなされた。さらに、変異形間の相互に成立する、いわゆる統語的階層関係の存在も指摘された。但し、その場合、タイの慣用句の階層関係のうち下位の階層関係が存在することは指摘されたが、上位の階層関係については言及がなかった。そこで、本稿では石田(2000)の分析（統語的操作の階層関係の一部、レベル④からレベル⑥へのもの）を踏まえ、タイ語慣用句の統語的操作に上位の階層関係が見出されるかどうかを検討する。即ち、下位の階層関係の分析内容を要約して示したのち、日本語の慣用句に見られる階層関係と、タイ語における階層関係を両言語の慣用句の上位の階層関係を中心に対照分析することを目的と

する。

2. 動詞慣用句の統語的操作

慣用句は、統語的制約が強いということがよく指摘される。例えば、宮地(1982b)は慣用句の「形式上の制約」として受身表現や否定表現などが作れないこと、慣用句に対して連体修飾語や副詞を付加・挿入できないことを挙げている。

ところが、統語的制約が比較的強い慣用句もあれば比較的弱い慣用句も認められるので、慣用句の統語的固定性は非常に幅のあることが特徴である(石田 2000 : 25)。森田(1985)は、慣用句の形態を変えることが困難であればあるほど、その句の結合度が高いと述べている。

石田(2000)は慣用句の統語的制約の度合いを計る検証項目を次のように設定した。

表 1 動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係に示された統語的度合いを計る
検証項目

		統語的操作のタイプ	統語的操作
↓ 下位の階層	レベル①	句の再構成を行う操作	【1】 名詞句へ転換する ⁽²⁾
	レベル②	文の再構成を行う操作	【2】 受身表現にする ⁽³⁾
	レベル③	構成要素を他の要素と置き換える操作(1)	【3】 命令表現にする ⁽⁴⁾ 【4】 意志表現にする ⁽⁵⁾
↑ 上位の階層	レベル④	構成要素に他の要素を付加する操作	【5】 連体修飾語を付加する (例 5)参照 【6】 敬語表現にする ⁽⁶⁾ 【7】 連用修飾語を挿入する (例 8)参照
	レベル⑤	構成要素を他の要素と置き換える操作(2)	【8】 肯定・否定表現にする (例 14)参照
	レベル⑥	慣用句全体が関わる付加	【9】 連用修飾語を付加する (例 19)、20)参照 【10】 慣用句を修飾成分にする (例 16)、17)参照

石田(2000 : 27)をもとに筆者作成

レベル①に属する慣用句はかなり自由な振る舞いをするので、「一般連語句」に性質が

似ていると言える。このように慣用句と一般連語句の間に境界線を引くのが困難である場合があるが、慣用句は一般連語句とは異なり必ず何らかの統語的な制約があるという点で、この二つは区別できると思われる。

3. 統語的操作の階層関係

上に設定した統語的操作のタイプは、レベル①からレベル⑥にいくに従って、次第に慣用句が操作を受けやすくなっていることを示している。個々の慣用句についてどのような操作を許すのかを調べていけば、統語的操作の上限を見出すことが出来る(石田 2000)。ある慣用句があるレベルの操作までを許す場合、その慣用句はその「レベルに属する」という言い方をすると、あるレベルに属する慣用句は原則としてそれより下のレベルに含まれる操作も受けられると言える。

前掲石田は日本語の慣用句を対象としており、上の統語的操作を全階層により分析した。本稿は石田と、下位の階層関係に関するカンタムパン (2012b など) の分析を踏まえ、タイ語慣用句の統語的操作に上位の階層関係(レベル④からレベル⑥まで)が見出されるかどうかを検討する。

4. 統語的操作の下位の階層関係——上位の階層関係の分析の前提として——

本稿のテーマである上位の階層関係について分析するに先立ち、本節では、下位の階層関係について明らかになっていることを要約して示す。

従来、言語によらず慣用句は「形式的固定性」を持つといわれているが、カンタムパン (2012a など) によって、形式的固定性に外れるいわゆる変異形が存在し、変異形間の関係としてタイ語に慣用句の統語的操作の下位の階層関係が存在することが確認された。それらの統語的操作のタイプは以下のとおりである。

4.1 日本語にもタイ語にも存在する慣用句の階層関係の操作

この階層関係の確認には 1) 受身表現化 2) 命令表現化、意志表現化の手続きがある。

4.2 日本語に存在するが、タイ語には存在しない慣用句の階層関係の操作

日本語では、この階層関係に名詞句への転換がある。タイ語では、「thîi」を用いた名詞句への転換の操作があるが、慣用句に対して thîi により名詞句への転換を許される慣用句は表れていない。

レベル①の操作は、慣用句内の構成要素で名詞と動詞が並べ換えられ、その結果、慣用句の統語的な機能が変わるといった操作である(石田 2000: 29)。これを「句の再構成」と見なされた。例えば、「目を伏せる」→「伏せた目」などである。形容詞や動詞が名詞を修飾する関係で結ばれるときには、名詞と修飾語が直接結びついた形と、修飾

節が関係詞「thîl」によって導かれた形がある(三上 2002:94)。しかし、この関係詞 thîl は習慣的に省略されることもよくある。これにより、名詞句化がなされると見ることができる。例えば、一般の単語の句「duum náam」(飲む・水) - 「náam (thîi) duum」と言えるが、慣用句の場合、「tít muu」(付く・手)(持つ、携帯する) - *「muu (thîi) tít」¹、などである。慣用句の中の名詞と動詞を並び変えられたとしても、並び変えた後の慣用句はもとの慣用句の意味と異なっている。

日本語と異なり、タイ語では、慣用句の構成要素の順番が変わることにより慣用句全体としての意味を失ってしまうため、名詞句への転換を許される慣用句はないことが分かった。

以上、下位の階層関係に関して述べた。次節では、これらを踏まえ、上位の階層関係を分析する。

5. 統語的操作の上位の階層関係

5.1 レベル④ 構成要素への付加

レベル④の操作は文中の共起関係 (syntagmatic relations) に関わるものである。つまり、慣用句の構成要素である名詞や動詞に修飾語や敬語の接尾辞などを付加する操作である。日本語のレベル④の操作には次の3つが含まれる。連体修飾語の付加、敬語表現及び連用修飾語の挿入である。これに対して、タイ語のレベル④の操作には連体修飾語の付加と連用修飾語の付加があるが、尊敬語表現を作る操作はない。以下では、紙幅のため尊敬語表現については省略する。

5.1.1 連体修飾語の付加

(1) 日本語の「連体修飾語の付加」

「連体修飾語の付加」とは慣用句の構成要素である名詞に連体修飾語を付加する操作である(石田 2000:32)。例(目を光らせる) きびしい目を光らせる、(耳に入る) 香代子の耳に入った

- 5) 昨夜、そのことが遊びに来た香代子の耳に入った。(『男と女の世の中』源氏鶏太 435)

これに対して、「連体修飾語の付加」ができない例もある。

- 6) (頭に来る) *大きな / *転回の速い / *いらいらした 頭に来る

1 *印は「言えない、言わない」表現であることを示す。

(2) タイ語の「連体修飾語の付加」

タイ語の修飾関係の原則は「被修飾語＋修飾語」である（三上 2002 : 62）。例えば、「nǎŋsǔw chán」（本・私）である。また、ものの所有や所属を表す場合、日本語の「の」に相当する「khǒŋ」という語を使用して、「nǎŋsǔw (khǒŋ) chán」（本・の・私）＜私の本＞のように言うこともできる。

タイ語の慣用句では、次のような例がある。「ráksǎa nâa」（保つ・顔）＜面子を保つ＞

7) méεwâa cà? mâi mii nǎnthoŋ thîi cà? tham

～ても 未来形 否定形 ある お金 関係詞 未来形 する

kôorǔrǎa kǒw yantôŋ pai yìpyuwum khâw maa

豪華な も ～なければならぬ 行く 借りる 彼 来る

phûa ráksǎa nâa khǒŋ tuaeŋ

～ために 保つ 顔 の 自分

＜たとえ豪華に振舞うような金がなくとも、自分の面子を保つために金を借りて来なければならないのだった。＞（Chinvigai 2003 : 51）

「ráksǎa nâa」は日本語の「面子を保つ」の意味に相当する。このような形で「khǒŋ tuaeŋ」（自分の）という連体修飾語が「nâa」の後への付加が可能であることがわかる。

5.1.2 連用修飾語

(1) 日本語の「連用修飾語の挿入」

「連用修飾語の挿入」とは、慣用句の構成要素である動詞の直前に連用修飾語を付加する、つまり、句中に連用修飾語を挿入する操作である（石田 2000 : 32）。（顔が利く）顔が大いに利く

8) 財界人なら田中先生は顔が非常に利くんですよ。（石田 2000 : 33）

これに対して、「連用修飾語の挿入」ができない例もある。

9) (耳にする) *耳にちらっと (*偶然 / *初めて) した

(2) タイ語の「連用修飾語の付加」

タイ語の慣用句では、次の例がある。nâa sǎa thanthii

nâa sǎa（顔・失う）＜（失望して）がっかりして顔の、（恐怖で）色を失った＞

10) khun phan kamlaj dǎen òk maa kàp phûuyǐŋ

～さん パン（人名） 進行形 歩く 出る 来る と（一緒に） 女

khon nán phoo hěn phanrayaa kǝw nâa sǝa thanthii
 人 その すると 見える 奥さん そして 顔 失う すぐに
 <パンさんはその女と一緒に出てきたとき、奥さんを見つけて、急に色を失っ
 た。> (宮本 1992 : 17)。

上記の例では、「nâa sǝa」の後に「thanthii」を「付加」することはできる。すなわち、タイ語の慣用句は句の直後に「付加」できる。

次に、慣用句がある階層の操作を許したとき、それより下の階層の操作も許すと言えるかどうかを確かめる。上に見てきたレベル①-③の慣用句には、慣用句の構成要素への以下のような付加を許すものが多い。

レベル① 関係詞「thii」により「名詞句への転換」操作を受けられる慣用句が見当たらない。

レベル②に属する「hàk nâa」(折れる・顔) <顔を潰す> (連用修飾語の付加)

11) kǝət maa phǝŋkhǝy hěn khunnǝu sui thùuk
 生まれる 来る ~たばかり 見る お嬢さん スイ(人名) 受身形

hàk nâa pen khráŋrǝk

折れる 顔 である 初めて

<生まれてきてから、スイお嬢さんが初めて顔を潰されたことを見たところ
 ず。> (<http://ling.arts.chula.ac.th/tnc2/>) [PRNV111]

レベル③に属する「kúu nâa」(挽回する(または改正する)・顔) <名誉を維持する、
 名誉を挽回する、顔を立てる> (連体修飾語の付加)

12) thǝə pen lǝuk kàtanyuu cun yǝəm tham thúkyàŋ
 彼女 である 子供 親孝行 だから 承知する やる 全部

phúā chǝy kúu nâa bi?daa maandaa wái

ために 手伝う 挽回する 顔 父親 母親 ~ておく

<彼女は親孝行だから、親の名誉を挽回するためなら何でもする。> (宮本
 1992 : 20)。

「kúu nâa」の他に「ǝok nâa」(出る・顔) <表面に出る>などもレベル③に属する慣用句である。

レベル④に属する「khǝay nâa」(売る・顔) <恥をかく、恥ずかしい> (連用修飾語
 の付加)

13) thǝa phǝm thùuk càpsài kuncǝmɯm pai phóp khonrúucàk
 もし 僕 させる 填める 手錠 行く 会う 知り合い

phôm khon khăay nâa khâw yālāw

僕 多分 売る 顔 その人 大変

くもし僕が手錠を詰めさせられて知り合いに会いに行くのなら、僕は**大変恥をか**くでしょう。 > (<http://horo.teenee.com/horo-karma-51.html>)

レベル④には「khăay nâa」なども含まれる。これらの慣用句は受身表現の制約が強い。また意志表現・命令表現や名詞句への転換の制約も強い。

① (名詞句) * 「nâa (thîi) khăay」

③ (命令) * 「yāa khăay nâa」

② (受身) * 「thāuk khăay nâa」

③ (意志) * 「tāncāi khăay nâa」

タイ語の慣用句においてレベル④に含まれる操作は、レベル①-レベル③の操作に比べると、慣用句に対して統語的制約が弱い、つまり、より自由に慣用句にしやすい操作であると言える。

5.2 レベル⑤：構成要素の置き換え：肯定・否定表現

5.2.1 日本語慣用句のレベル⑤

レベル⑤の操作は慣用句の構成要素である動詞をモダリティ表現で置き換える操作である (石田 2000:33)。

14) 尾張出身の人ならば、反対されそうなものと気をつけているが、まだそういう話も耳にしないので、単に一説として自分の知っていることだけを並べてみる。(柳田國男(2004) 『毎日の言葉』教育出版)

「肯定・否定表現」は「名詞句への転換」、「命令表現」、「連体修飾語の付加」など、レベル①-④の操作と比べて慣用句に対して統語的制約が弱い、つまり、より自由に慣用句にしやすい操作だと言える。(石田 2000 : 35)

5.2.2 タイ語慣用句のレベル⑤

タイ語の否定文は動詞の前に「māi」「māi dāi」等をつける。「māi+動詞・形容詞」は状態や動作を否定する場合の表現である。「māi dāi+動詞・形容詞」は、動作や状態が成立・実現するに至らないことを表す (三上 2002 : 102)。

次のような例がある。

「sāu nāa」(立ち向かう・顔) <顔を合わせる、逢着する、顔向けする>

<sāu nāa」(立ち向かう・顔) >の否定形は「māi sāu nāa」である。

15) māɛcāa khāwāy pen kāncāam māɔp tāncāiikan

でも ～たことがある である 主唱者 デモンストレーション 色分け

maakwɔn tɛɛ wanníi tháŋ náttawút sǎikwáa hɛŋ
 以前 しかし 今日 も ナットウット・サイクア (人名) の
 phákpɰwathai lé sǔmsàk kosǎisúk hɛŋ
 タイ貢献党 (プアタイ党) も ソムサック・コサイスック (人名) の
 phákkāanmwāŋmǎi klàp tɔŋ maa
 新政党 (ガーン・ムアン・マイ党) かえって ~なければならぬ くる
 sǔam mùak santaakwɔt sài sǔa sǐichomphuu mwānkan
 かぶる 帽子 サンタクローズ 着る シャツ ピンク 同じ
 nai khāay oprom làksùut kaan pháttanaa kaanmwāŋ
 中 合宿 研修 講座 こと 発展する 政治
 tàŋkhontàŋ mái sǔu nāa kan
 別々 否定形 立ち向かう 顔 ~合う

< 貢献党のナットウット・サイクア氏と新政党のソムサック・コサイスック氏は互いに対立する派閥でデモの主唱者を務めたことがある。しかし、今日二人はお揃いのサンタクローズの帽子をかぶりピンク色のシャツを着て来なければならなかった。政治発展のための研修会において、お互いに顔を合わせることはなかった。 > (<http://www.facebook.com/reddemocracy/posts/239421162795626>)

慣用句の階層関係の原則として、慣用句がある階層の操作を許した場合それより上の階層の操作は許さない。「sǔu nāa」がレベル⑤に属するとみなし、例にとって検討してみよう。

- ① (名詞句) * 「nāa (thīi) sǔu」 ③ (意志) * 「tāŋcaɪ sǔu nāa」
- ② (受身) * 「thùuk sǔu nāa」 ④ (連体・付加) * 「sǔu nāa khɔŋ phǔm」
- ③ (命令) * 「coŋ sǔu nāa」 ④ (連用・付加) * 「sǔu nāa thanthīi」

上の考察をもとに、「肯定・否定表現」は「名詞句への転換」、「命令表現」、「連用修飾語の付加」など、レベル①-④の操作と比べて慣用句に対して統語的制約が弱い、つまり、より自由に慣用句にしやすい操作であると言える。

5.3 レベル⑥ 慣用句全体が関わる付加

レベル⑥には、「慣用句の修飾成分化」及び「連用修飾語の付加」といった操作が含まれている。

5.3.1 慣用句の修飾成分化

「慣用句の修飾成分化」は、慣用句が修飾成分として名詞 (句) に付加される操作である。

(1) 日本語慣用句の「慣用句の修飾成分化」

日本語では、レベル⑥の操作はレベル④の操作と同様、文中の共起関係に関わるものである。しかし、レベル④の操作は慣用句の**構成要素**に他の要素を付加するといった操作であるのに対して、レベル⑥には**慣用句全体**に他の要素を付加する操作や、**慣用句全体**を他の要素に付加する操作が含まれる。(石田 2000: 35)。「連用修飾語の付加」においては、慣用句は被修飾成分であるが、「慣用句の修飾成分化」においては逆に、慣用句自体が修飾成分になり、被修飾成分である名詞(句)に付加される。しかし、ここでは、両方とも慣用句全体が関わっていることから、同じタイプのものとみなす。

「慣用句の修飾成分化」の用例は以下の通りである。

16) まったく、頭に来る馬鹿が多い。(筒井康隆『狂気の沙汰も金次第』89)

17) 「人間は誰でも自分には歯が立たないものがいちばん好きだからね。」(三島由紀夫『禁色』95)

「頭に来る」、「歯が立たない」はレベル⑥に属すとみなす。レベル⑥に属する慣用句は、レベル①-⑤の操作に比べると、慣用句に対して統語的制約が弱い、つまり、より自由に慣用句にしやすいついと言える。

(2) タイ語慣用句の「慣用句の修飾成分化」

タイ語では、形容詞や動詞が名詞を修飾する関係で結ばれるときには、名詞と修飾語が直接結びついた形と、修飾節が関係詞の *thîi* によって導かれた形がある(三上 2002:94)。つまり、「連体修飾語の付加」においては「被修飾語(慣用句) (+*thîi*) + 修飾語」という形になる。これに対して、「慣用句の修飾成分化」においては「被修飾語 (+*thîi*) + 修飾語(慣用句)」という順になる。つまり、慣用句自体は修飾成分になり、被修飾成分である名詞(句)に直後に置かれる。次に「慣用句の修飾成分化」の用例を示す。sadùt taa (著しい・目) <目につく>

18) pen pâay thîi sadùt taa mâak khít wâa nâacà?
 である 看板 関係詞 著しい 目 とても 思う と きつと
 rúu naithanthii
 分かる すぐに

<目につく看板だから、すぐにわかると思います。> (Neancharoensuk 2009: 21)

慣用句「sadùt taa」(目につく)は名詞「pâay」(看板)を修飾する。つまり、修飾成分になっていると言える。

5.3.2 連用修飾語の付加

(1) 日本語慣用句の「連用修飾語の付加」

「連用修飾語の付加」は慣用句の直前に連用修飾語を置くということである（石田 2000 : 35）。

- 19) 「迂闊に手を出す」
 20) 運ばれてくる皿にほとんど手をつけず…

(2) タイ語慣用句の「連用修飾語の付加」

5.1.2 では「連用修飾語」について述べた。日本語には「連用修飾語の挿入」操作がみられる。これに対してタイ語は「連用修飾語の付加」操作が可能だと言える。つまり、タイ語はレベル⑥の「連用修飾語の付加」とレベル④の「連用修飾語の付加」と同じであり、レベル④に分類されることになる。

ところが、タイ語の形容詞や動詞を修飾する言葉（副詞的修飾語）には、副詞、前置詞句、数量名詞などがある。形容詞はそのままの形で副詞として動詞を修飾することができる（三上 2002 : 98）。

- 21) *kháw dæən cháa* (彼・歩く・ゆっくり) <彼はゆっくり歩いた。>

慣用句は動詞（句）を修飾することができる。これにより、「連用修飾語の付加」がなされる。つまり、慣用句自体は修飾成分になり、被修飾成分である動詞（句）の直後に置かれる。

nâa hêɛn (顔・乾く) <ひもじさで、または失望して) やつれ果てた顔をした> 用いた例を次に示す。

- 22) *trɔɔŋ thùuk dù? sákphák dæən nâa hêɛn òok maa*
 人名 受身形 叱る しばらく 歩く 顔 乾く 出る 来る
 <トロンは叱られて、しばらくしてやつれ果てた顔をして歩いてきた。>

(<http://www.thairath.co.th/ent/novel/tawipob/ch1>)

「*nâa hêɛn*」は連用修飾語の付加を許すが、それより下の操作を受けることができない。「*nâa hêɛn*」を例に検討してみよう。以下のように、「*nâa hêɛn*」はレベル⑥に属するとみなす。

- | | |
|-------------------------------------|--|
| ① (名詞句) * 「 <i>nâa thîi hêɛn</i> 」 | ④ (連体・付加) * 「 <i>nâa hêɛn khɔɔn chán⁽⁷⁾</i> 」 |
| ② (受身) * 「 <i>thùuk nâa hêɛn</i> 」 | |
| ③ (命令) * 「 <i>cɔŋ nâa hêɛn</i> 」 | ④ (連用・付加) * 「 <i>nâa hêɛn bɔy⁽⁸⁾</i> 」 |
| ③ (意志) * 「 <i>táŋcái nâa hêɛn</i> 」 | ⑤ (肯定・否定) * 「 <i>mái nâa hêɛn</i> 」 |

レベル⑥に含まれる操作は、レベル①-⑤の操作に比べると、慣用句に対して統語的制約が弱い、つまり、より自由に慣用句にしやすいと言える。

6. まとめ

6.1 タイ語における慣用句の統語的操作には階層関係が存在する

従来、言語によらず慣用句は「形式的固定性」を持つという指摘がなされているが、本稿では、タイ語に慣用句の統語的操作の階層関係が存在することが証明された。

6.2 統語的操作のタイプ

6.2.1 日本語にもタイ語にも存在する慣用句の階層関係の操作

この階層関係には 1) 受身表現化 2) 命令表現化 3) 意志表現化 4) 連体修飾語の付加 5) 肯定・否定表現化 6) 連用修飾語の付加 (レベル⑥) 7) 慣用句の修飾成分化 がみられる。

6.2.2 日本語に存在するが、タイ語には存在しない慣用句の階層関係の操作

この階層関係には 1) 名詞句への転換 2) 尊敬表現化 3) 連用修飾語の挿入・付加 がみられる。

名詞句への転換の場合、タイ語では「thîi」により慣用句の中の構成要素の順が変わることで、慣用句全体としての意味のまとまりを失ってしまう。すなわち、名詞句への転換を受けられる慣用句は表れないことが分かった。

尊敬表現化の場合、タイ語では孤立語に属するため、尊敬を表す「お～なる」でも日本語のような形態的形式が明らかに表れていない。

連用修飾語の挿入・付加の場合、日本語と異なりタイ語には、連用修飾語を「付加」できるが、連用修飾語を「挿入」することはない。これはレベル④「構成要素への付加」に関わる操作である。

さらに、「連用修飾語の付加」は、タイ語では上のようなレベル④「構成要素への付加」という操作のみならず、レベル⑥「慣用句全体に関わる付加」という操作を行うこともできる。

以上、本稿ではタイ語慣用句の統語的制約の諸特徴についての一部を述べた。

7. 結語・今後の課題

本稿は、日・タイ語における上位の階層の階層関係を対照分析することを目的とし、タイ語慣用句の統語的操作に階層関係が見出されるかどうかを検討した。その結果、慣用句の統語的操作の上位の階層の階層関係がタイ語にも存在することが明らかとなった。さらに、日本語・タイ語の慣用句は統語的操作に相違点があることも分かった。

今後の課題としては、タイ語に固有の統語的操作及び日本語との比較についても研究を深めるべきだと考える。

注

- (1) 用例の前に「*」がある場合は、「言えない、言わない」ことを示す。
- (2) 名詞句への転換
 (手を打つ) いま最終的に、彼らの党派へ向けて打つ手として、これがある。
- (3) 受身表現化
 (目をつける) 「ほう、さすがは君だね。もうだれかに目をつけられたのか？」
- (4) 命令表現化
 (足を洗う) 「悪事を教えたのはこの俺だし、足を洗えといったのもこの俺だ。」
- (5) 意志表現化
 (耳を貸す) …縁談がもち上がるんだけど、耳をかそうともしないの。
- (6) 尊敬表現化
 (耳に入る) 「多分まだどなたのお耳にも入っていないことでしょう。」
- (7) * 「nâa hêεŋ khǒŋ chán」は個々の語の意味を合わせて「私の乾燥した顔」という意味に解釈できる。しかし、慣用句とする全体の固有の意味には解釈できない。
- (8) * 「nâa hêεŋ bòy」は個々の語の意味を合わせて「よく顔（の皮膚）が乾燥している」という意味に解釈できる。しかし、慣用句とする全体の固有の意味には解釈できない。

参考文献

- 石田プリシラ (2000) 「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』第7号、国立国語研究所、pp. 24-43
- 伊藤眞 (1999c) 「慣用句の具象性についての一考察」『言語文化論集』第51号、筑波大学現代語・現代文化学系、pp. 95-117
- カンタムパン、スタラー (2012a) 「日・タイ語の慣用句の変異形と固定性の対照研究」『語学教育研究論叢』、第29号、大東文化大学語学教育研究所、pp. 161-181
- カンタムパン、スタラー (2012b) 「日・タイ語の動詞慣用句の統語的階層関係一下位の階層一」『外国語学会誌』第41号、大東文化大学外国語学会、pp. 251-265
- 田中寛 (2004) 『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』、ひつじ書房
- 富田竹次郎 (1990) 『タイ語辞典 改訂版』、天理養徳社
- 三上直光 (2002) 『タイ語の基礎』、白水社
- 宮地裕 (1982b) 「慣用句解説」『慣用句の意味と用法』、明治書院、pp. 237-315
- 村木新次郎 {1985} 「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』、1月号、明治書院、pp. 15-27

森田良行 (1985) 「動詞慣用句」『日本語学』、1月号、明治書院、pp. 37-44

Sorsothikul, Rachanee. (1981) **Resemble Meaning of Thai Idioms and English Idioms (Samnuan Angklit le Samnuan Thai thii mii khwammay klayklungkan)**. Bangkok: Chulalongkorn University Press.

用例出典

宮本マラシー (1992) 『タイ語「身体用語」慣用句—「頭」「顔」「目」—』、大阪外国語大学

Chinvigai, Wanna. (2003) **A Comparative Study of Face-related Figurative languages in Thai and Japanese**. Master's thesis Thammasat University.

Neancharoensuk, Suneerat. (2009) **Step up Samnuan yipun le Khamprasom Kanji (日本語単語ドリル 慣用句・四字熟語)**. Bangkok: TPA Press.